



岩 波 文 庫

30-236-1

こぶとり爺さん・かちかち山

—日本の昔ばなし(1)—

関 敬 吾 編

岩 波 書 店

こぶとり爺さん・かちかち山 ☆☆

1956年5月6日 第1刷発行 ©

1979年2月20日 第28刷発行

¥ 200

編 者 ^{せき}関 ^{けい}敬 ^と吾

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 ^{株式}岩波書店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

岩 波 文 庫

30-236-1

こぶとり爺さん・かちかち山

—日本の昔ばなし(Ⅰ)—

関 敬 吾 編

岩 波 書 店

この本を読まれるみなさまへ

ここに集めた昔話は、古くから日本に伝わり、村々の老翁老嫗たちによって語られてきたもので、いわば書きとった口承の物語です。

一 昔話はいうまでもなく、ある特定の個人によって創られたものではありません。日本の昔話についていいますと、われわれの祖先たちによって創造された共有の文化財なのです。民族全体によってうけつがれ、現在まで語り伝えられてきたものです。アンデルセンの童話の中には、民衆の間に語り伝えられたものと一致するものがあります。しかしそれはアンデルセン個人の作品です。わが国でも小波きよなみの名によって知られている幾つかの童話がありますが、それは古い文献や外国のこうした物語を基にして巖谷小波自身が書きかえたものです。ですからそれ自身は価値があるにしても、ここにいう昔話とは自ら異なるものなのです。

二 みなさまは、今昔物語や宇治拾遺物語や、或はこれまでどこかで読み、またどこかで聞かれた類似の物語とこの本の昔話とがかなり相違しているということに奇異の感を抱かれるでありましょう。口から耳に伝えられるこうした物語はきわめて変化が多いのです。地方により家々によって相違があります。幾百回、いく千回となく語りつがれているうちに、ある部分は脱落した

り、またちがった要素がつけ加えられてもきます。その伝承されている地方なり、国土なりの生活環境や、文化のあり方によってこの変化が起るのです。昔話がよそから運ばれて来て、そのなかに親しみのない事柄や動物の名前や、ちがった慣習や信仰が見いだされますと、その土地にふさわしいものと取り変えられるのです。また語り手自身の性格や教養や職業によっても変わります。昔話は万華鏡にも比すべき変化をします。これがまたその民族や地方や時代の文化の指標ともなるのです。昔話にはこうした語り手の自由意志によって変えられる部分と、みだりに変えてはならない部分とがあります。この変化しない部分を一般に昔話の類型といっていますが、この不変の構造はしばしば他の民族の昔話と共通するものをもっています。

三 昔話はもともと読む文学ではなく耳の文学です。昔話が実際に語られるのは、家々では冬の夜の炉辺、夏の夜の涼み台などです。祖父母や母がその子や孫に語って聞かせるのが普通のあり方です。われわれの少年時代の経験から考えてみても、本で読んだものはその一部しか記憶に残っていませんが、こうして語って聞かされたものは全体として覚えているものが多いものです。こうした物語は、幼いものに直接読ませるよりは、語って聞かせた方がはるかに効果的です。この意味からいっても、昔話にはわからない部分はありません。方言を用いて自分たちの言葉で語られているのが普通でして、それによって、かえって文学的效果が発揮される場合も多いのです。しかし、この書では標準語に書き改めました。ただ語られる調子を生かすために、わかりやすい

方言は残しておきました。

いま一つは、昔話はもともと幼いものだけを対象にして語られたものではありません。そのためいまの幼少の聞き手に対して不適當と思われる辞句もありますので、こうした個所は編者の判断によって語られたままの形を多少かき改めた場合もあります。

またこれをお子さんに読んで聞かせるみなさまの判断によって多少変えて話されても差支えないと思います。しかし根本的な構造はくずさないで下さい。と申しますのは、まとまった昔話は発端と経過と結末とが必ず語られているからです。そればかりでなく、昔話はわれわれの祖先の総意によって創られたものであります。われわれは庭の植木をみることも必要ですが、風雨にたえた樹木や森のなかに、自然の美しさを発見することもまた必要なことであります。

四 わが国の昔話は、殆どが農民を主体とする庶民層の間に保存され語られてきましたので、その生活が主要な内容となっています。従って語られている事柄がしばしば都市や現在の生活にあまり親しみのないこともあります。その思想なり考え方で理解しにくい点があったとしても、こうした過去の文化をわれわれはありのままにいかにかに受けつぎ、将来にいかに残すかということがいまの私たちの文化を進める上に必要なことなのです。この意味でこの書を編んでみました。

五 最後に、この集は全体で三巻をもって形をなします。最近、わが国の昔話の採集の仕事は大いに進んで、不文の物語が多く記録されました。その類型は正確にいえませんが六百を下りま

せん。なかには同じ種類の話だけで百を超えるものもあります。ここではこの中から編者が口承文学として面白く、かつ典型的と思われるものを百数十篇選びだしました。そうして、それぞれの巻に、日本のこどもたちに最も親しみの深い、しかも古くから記録されてきた、桃太郎、こぶとり爺さん、花咲爺、かちかち山、猿蟹合戦などの類話を採録しておきました。これらが民衆の間でいかに語りつがれてきたかを示したわけです。読者の記憶といかに相違しているかを比較しながら読んでいただければ幸いです。

關 敬 吾

目次

一 瓜 姫……………	一〇	一四 爺 と 蟹……………	七九
二 たにし長者……………	一五	一五 地藏浄土……………	八三
三 手なし娘……………	二五	一六 こぶとり爺さん……………	九〇
四 魚 女 房……………	三三	一七 天ぶく地ぶく……………	九四
五 鶴 女 房……………	三六	一八 夢を買うた男……………	九七
六 猿の婿どの……………	四〇	一九 灰まき童児……………	一〇〇
七 母の目玉……………	四四	二〇 三人の兄弟……………	一〇五
八 天降り乙女……………	四七	二一 犬と猫と指輪……………	一二二
九 謎 婿……………	五五	二二 聴 き 耳……………	一二五
一〇 かぶ焼き甚四郎……………	六二	二三 火男の話……………	一二九
一一 絵姿女房……………	六五	二四 わらしべの王子……………	一二二
一二 山の神とほうき神……………	六九	二五 金の茄子……………	一二五
一三 猿 長 者……………	七六	二六 見とおし童児……………	一二八
		二七 豆の太木……………	一三三
		二八 運のよい獵師……………	一三七
		二九 馬喰やそ八……………	一三九

三 旅 人 馬……………一五一

三 牛 方 と 山 姥……………一五五

三 飯 く わ ぬ 女……………一六二

三 一 軒 屋 の 婆……………一六六

三 髪 そ り 狐……………一六九

三 化 狸……………一七三

三 八 っ 化 け 頭 巾……………一七六

三 小 鳥 の 昔 話……………一七八

1 ほ と と ぎ す 兄 弟

2 啄 木 鳥 と 雀

3 山 鳩 の 孝 行

4 郭 公

5 水 乞 鳥

6 山 鳩 の 不 孝

7 片 脚 脚 絆

8 時 鳥 と 継 母

9 行 々 子

10 馬 追 鳥

三 動 物 の 競 争……………一八九

1 猫 と 蟹

2 虎 と 狐

3 狐 と 獅 子 と 虎

4 猫 と 十 二 支

5 鯨 と な ま こ

三 狐 物 語……………一九四

1 尻 尾 の 釣

2 狐 と 川 獺

3 魚 泥 棒

4 熊 と 狐

5 狸 と 狐

6 鶉 と 狸

四 か ち か ち 山……………二〇六

こぶとり爺さん・かちかち山

——日本の昔ばなし（I）——

とんとあるはなし、あったかなかったかは知らねど、昔のことなれば、無かつたこともあった話にして聞かねばならぬ。

瓜 姫

——新潟県古志郡——

昔、爺じいさまと婆ばあさまとがありました。ある年胡瓜きゅうりをまくと、ひと鞍くら*に目立めだつてふとい茎きが一本できました。延のびることはのびたが、ふしぎなことにはむだ花ばかりで、成なり花はどうしたことか、一つもなかった。爺さまも婆さまも、「おかしいこともあるもんじゃ、ほかの種でもまちがったんじやないかな」というているうちに、この茎一本だけ延のびてのびて、鞍くらのてっぺんを越こしてしまつたが、そこで始めてずば抜けて大きな成り花が一つつきました。この鞍くらのてっぺんについた大きな成り花は、もう立派な一本の胡瓜ぐらいの大ききで、それが大きくなり、長くなり、ずんずんと下つて、地面にとどきそうになりました。「こりやどえらい胡瓜がなつたぞ」といって、爺さまも婆さまもたいそう喜んでいました。「こいつをすっかりみのらせて、種をとろう」と、黄

色になるのを待つて、二人がかりでかついで家にもつて来ましたが、重くて板の間にどしんと降した拍子に、われて縦に口があいてしまいました。ところが、その割れ目から赤ん坊の泣声がしました。婆さまがいそいで取上げると、肥った女の子が生れていました。

爺さまと婆さまは、瓜から生れたから「瓜姫」と名をつけてかわいがつて育てると、だんだん大きくなって立派な娘の子になりました。この娘は、機織りが上手で、すぐに村一ばんになりました。瓜姫はまい日まい日、二階で機にのつて「てんからかん、てんからかん」と、一生けんめいに機を織つて、いつもたまげるような反物を織りあげました。爺さまも婆さまも、おかげで町へお寺詣りに行けるようになって、その帰りにはきつと瓜姫が好きなところ芋を土産に買つて来ました。「瓜姫よう、いま帰つて来たぞ、おかげでお寺詣りをして来たよ、お前のすきなところ芋を買つて来たよ」というと、瓜姫は機から降りてひげを一本一本むしつてところ芋を食べました。そのころ、天邪鬼という悪い奴がいて、大人の留守に娘のいるところに来て、娘にのりうつりました。天邪鬼が乗りうつると、おとなしい娘も氣立てが變つて、不器用な娘になりました。ある日、爺さまと婆さまは、「瓜姫よ、町へご門跡（坊主）さまが見えたから、拜みに行つてくるよ。誰が来ても、おらが帰るまでは、二階だつて戸をあけちゃいかんよ」といつて、すっかり戸じまりをして二人で出かけて行きました。

瓜姫がたった一人で、二階で「てんからかん」と機を織っていると、天邪鬼が隣の娘の声を

かつて「瓜姫よ、瓜姫よ」といってやって来ました。「なんだや」「遊びに行こうかのし。よせてくれや」「今日は、爺さまも婆さまもおらんから遊ばんよ」「一寸戸ちよつとを開けてくれ」「爺さんと婆さが、天邪鬼が来るから戸を開けちゃいかんというた」「だら、指一本入るだけ戸を開けてくれや。顔が見えんと面白うない。」瓜姫は、天邪鬼が来ても入ることはできまいと思つて、二階の窓の戸を指が一本はいるだけあけてやりました。「瓜姫、これじゃまだ顔も見えないから、もう一本はいるだけあけてくれや。」瓜姫はまた指が二本はいるだけ開けてやりました。「瓜姫や、指がもう一本はいるだけあけてくれや。」瓜姫は指が二本はいるだけ開けてやっても何のこともないから、指が三本はいるだけあけてやりました。すると、おそろしい爪つまのはえた指が二階の窓の戸のすき間にかかったかと思うと、からからつとあけて、天邪鬼が二階へとびこんで来ました。

瓜姫はおどろいて氣を失ひひっくりかえりました。しばらくして氣がついて起きあがったときは、もうもとの瓜姫ではなかった。天邪鬼がのりうつて、恐ろしい顔をしていました。がらがらと、糸が切れようがすこしもかまわずに機をおりはじめました。

やがて爺さまと婆さまが、町からところ芋を土産に買つて帰つて来ました。「瓜姫、いま帰つて来たよ」といって、二人が戸をあけて入つて来ると、瓜姫はいつもとちがつて、二階からどたとたんと降りて来て、しゃがれ声で「お土産はどうした」といって、婆さまからところ芋をひったくするようにして、ひげもむしらないでそのまま食つてしまいました。爺さまも婆さまもあきれて見

ていると、瓜姫はところ芋を食ってしまふと、またどんどん二階へ上つて、「じゃんがらじゃんがら」と、そうぞうしく機を織りはじめました。

爺さまは何だか変だなあといいながら、裏の畑に出てみると、一羽のきれいな小鳥が先の方からすーっと飛んで来て、そばの無花果いちじくの木にとまって、なにかしきりに鳴いてはまた家の前の方へいそがしそうに飛んでいきました。爺さまが何と鳴くだろうと耳をかたむけてきいてみると、

瓜姫の機に天邪鬼がのつたいよ

若衆わかしゅおうてくりやれ、ほーほー

と鳴いて、小鳥はまた家の前の方にとんでいきました。爺さまは「さては、天邪鬼奴あまのじやくめが、うちの瓜姫に乗りうつりやがった」と思って、二階にかけ上って行きました。瓜姫はそのもの音におどろいて見ると、爺さまがいまにもかみつような顔をしているので、機から降りて逃げようとして横木にけつまずいて倒れてしまいました。そのはずみに、ひどく顔と胸とを打って、もう二度と起きあがれなくなってしまうました。そのとき、瓜姫の体の下から鳩ぐらいの大きさの黒い鳥が一羽、きみのわるいなき声を立てて飛んでいきました。

婆さまはいまの物音におどろいて二階へ上つて見ると、瓜姫が倒れている側に、爺さまがぼんやり立っていました。婆さまは驚いて、爺さまといっしょになって、瓜姫の体にとりすがって、泣きながら「瓜姫や、瓜姫や」と呼んで見たが、瓜姫はもう少しも動かなくなっていました。そ

れから、瓜姫の体は時がたつにつれて、長いふくべに変わりました。それからというもの、爺さまと婆さまの畑にできる胡瓜は、葉一枚ごとに必ず胡瓜が一本ずつなるようになったそうである。

* 苗床、新湯では畝なしにうえた野菜の群。

たにし長者

——岩手県上閉伊郡——

昔、むかし、あるところに長者ちやうじやどのがありました。村の人たちは、あそこの長者どのは、不由ふゆということを知らない分限者ぶんげんしやだとうわさしておりました。ところが、それほどの長者どのの田を作っている名子なご（小作人のこと）の中に、その日のかまどの煙もたてかねるほどの貧乏な、百姓夫婦の一軒の家がありました。もう四十をこしていたけれども、どうしたことが、子供がありませんでした。夜になるといつも二人は、子供のないのをなげいておりました。「なんとかして、子供が一人ほしいものだね、わが子と名のつくものなら、かえるでもよい、たにしでもよいが」といって、水神すいじんさまにお詣りまいりして、願をかけておりました。

ある日、いつものように、田の草をとりに行っていて、「水神さま、もうし、そこらあたりにいるたにしのような子供でもよいから、どうかわたしに、子供を一人さずけてたもれ。あなとうと、あなとうと」といって、心から水神さまに祈っていると、どうしたことが、急におなかなかが痛んできました。がまんすればするほど、だんだん痛みがひどくなってきました。とうとうたまりかねて、はうようにして、家に帰って来しました。百姓は心配して、いろいろ介抱したけれども、ど